

Title	元代戦象考
Sub Title	The Mongols and war elephants in China
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.263(425)- 285(447)
JaLC DOI	
Abstract	According to, Marco Polo, the Mongols, led by Nescradin, defeated an army of the king of Burma at Uniain (Yungch'ang Fu in Yunnan Province) and captured many elephants. Polo said that from that battle Qubilai Khan began to have elephants in plenty for his armies, though before he had none for the army. But, through the whole history of China, we can find no record of the use of elephants in warfare, except a king of Ch'u 楚 who used them to scare away the soldiers of Wu 呉 when the latters besieged his capital in 506 B.C. Besides, the Chinese sources concerning the battle between the Mongols and the Burmese in 1277 are not consistent with the account of Polo in various points. Therefore some scholars went so far to doubt or even to deny the veracity and credibility of the latter. The writer of this article compared the Chinese sources with the narrative of Polo and reached the conclusion that the both are supplemental to each other and not always incompatible.
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0267

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

元代戦象考

前嶋 信 次

序 言

象はかなり古くから歴史に現われている。農耕に、運輸に、儀礼に、又は軍事などに使用された記録が多いが、インドでは刑罰のためにも、この動物を用いた事が伝えられている。大別して、アフリカ象とアジア象の二類になるが、前者は馴らし難く、従って人間が種々の目的に働かせたというような記録は乏しい。ただし、このアフリカ象というのは、その中南部にいる体躯巨大な種類のことで、昔は、アフリカの北部には少くもポエニ戦争ころまでは、サハラ以南の象よりも、小さく、インド象と較べても体力の劣るほどの象が住んでいたという。サハラ砂漠の中のタッシリの岩壁絵画は先史時代人の手になるものであるというが、その中にも象の絵がある。⁽¹⁾この種のものは、しかしインド象と同じく人に飼い馴らされ、その怜悯さをたたえられていた。カルタゴ人は、専らこれを軍用に用いたが、当時はまだ大量に集めることが出来たので、数百頭をシチリアに運んでローマ人と戦ったり、またイスパニアの征服に用いたりしたといわれている。ハニバルは四十頭をひきいてピレネーを越え、さらにアルプスを越えてイタリアにはいるとしたが、途中で寒さのため死んで、わずか一頭しか生き残らなかったとのことである。ザマの会戦に勝ったローマはカルタゴの戦象をとりあげ、新に馴らすことを禁じて、その戦力を殺ぐに努めた。⁽²⁾カルタゴ人の象戦の方法は、インド人のそれと同様であった。故にイ

インドからペルシアに入り、その経路でフェニキア人が学んだものがカルタゴ人に踏襲されたのではないかと思われる。

西歴五七〇年ころアラビアのサヌアーを首府としていたアビシニアの総督アブラハが象軍をもって、メッカを攻めたという伝説がある。コーランの第百五章は象 *al-Fil* と題し、この時のことが暗示してある。よってこの年を「象の年」と呼び、予言者マホメットはその頃に生れたといわれている。アビシニア人が戦争に象を使用したという記録は外にはないようだが、サヌアーを中心とするヤマン地方は、インドやペルシアと関係が深い所であるから、もし本当にアブラハが象軍をつれて来たとするれば、これもやはりインド象であつたろうと思われる。しかし、この話はアブラハの事蹟をも含めて、多分に伝説的の要素を含んでいるようである。

ペルシア人が戦争に象を用いた記録はアケメネス朝時代からかなり多くあつて、アレクサンドロス大王も前三三一年、ユーフラテス川にのぞむアルベラの戦で、ダリオス三世のペルシア軍中の象と戦っている。サーサーン朝にも象軍があつたので、イスラム時代に入って、アラビア人がメソポタミアに侵入したときは、その為に悩まされた記録が残っている。まず六三四年十一月、アル・ヒーラ附近の「橋の戦」で鉄甲を着せた象軍の突撃にあつてアラブ軍は大敗を喫した。主将アブー・ウバイドの如きは槍を手に巨象を迎えうったが、踏みにじられて壮烈な戦死をとげている。

六三七年の五月末頃のアル・カーディシーヤの決戦では、ペルシア軍の主将ルスタムは三十頭（一説に十七頭）の巨象を最前線に立てて戦い、アラブ軍士の心膽を寒からしめたが、アラブの方も象の腹帯を切つて、背上の楼を落したり、鼻や目などをねらつて象の勢を挫き、ついに大勝を得たといわれている。

ガズナ朝、ゴール朝、マムルーク朝などみな戦象を使用したか、フワールズム（ホラズム）王国でも同様であつた。さればチングス汗のモンゴル軍も、一二二〇年にサマルカンドに殺到したとき、ホラズム軍の戦象と遭遇している。もっとも西遼（カラキタイ）もホラズム王国と戦ったとき戦象を捕獲したというから、モンゴル人は恐らく、それより先、西遼

を滅ぼすにあたり、これらの象を目撃したかも知れない。ジュワイニーの史書によれば、チングス汗はサマルカンドで、敵軍から奪った象群に、飼料をあたえさせず、荒野に放って餓死するに任せたとのことである。⁽³⁾

元代の史料には象に関する箇条が多くあるが、特にマルコ・ポーロの書には、元軍がビルマの象軍と雲南の西境で激戦を交えたことについて精彩に富む記述がはいっている。しかし、ポーロの書のこの部分の真実性を疑う学者たちも少なくない。果して信憑すべからざるものであろうか。またポーロは元代には、クビライの軍も象を使用したと云っているが、元軍が戦象を使用したという如き記録は外には見えていない。それで、この点でもポーロの所伝は斥けるべきであろうか。これらの点について、次に卑見を述べて見たい。

象が歴史上、どのような役割を果たしてきたかということ、広い視野から研究したならば興味ある結果が生ずると思われる。本稿は、その第一著手として試みたものではあるが、史料の蒐集なども甚だ不備であることを自認している。

一

本年四月十三日の毎日新聞にベトナム戦争に象部隊が登場したという記事があった。その内容は「象が戦争に使われた歴史は紀元前ローマを攻めたカルタゴのハンニバル將軍のアルプス越えまでさかのぼるが、北ベトナムから南への浸透作戦に象部隊が登場した。米軍筋によると、非武装地帯のすぐ南側で先月、弾薬など軍需物資を背に積んだ象の一隊を空中偵察で確認したという。これまでもベトナム部隊はジャングルの中で象や水牛を輸送用に利用しているが、北からの浸透に象が登場したのは初めて。深いしげみの中での動物による輸送は空中から発見されにくい利点が買われているわけだ。ところで米軍の激しい砲爆撃のとばちちりを受け、ひどい目にあっているのは野生の象。専門家の推定によると、ベトナムには三千頭ばかりいたが、いまでは半減してしまったという。(ロイター共同)」というのである。

象を戦争に使用した最初はハンニバルではなくて、やはりインド人であろうと思われる。インドにおける戦象のことは一九六五年に出たサルヴァ・ダマン・シング氏の「古代インドの戦争―特にヴェーダ時代について―」⁽⁴⁾という著書中になり詳しい研究が収めてある。それによると人間と象の交渉は悠久の昔に溯るもので、モヘンジョダロ出土の土偶や印章にすでに馴象の姿が表現されており、インダス文明の時代に、早くもこの従順で伶俐な動物は乗用その他に利用されていたことが明かであるという。

ピゴットの「先史時代のインド」によると「象はハラッパー人によって家畜化されたことが殆ど確実な諸動物中に含まるべきであろう。そして印章上に表現されたものを見ると、今日のインドで認められる二種類、すなわち背が平たく、頭が角ばり、頑丈な脚をもった *Komoria Dhundia* 種と、体格がそれほど重厚でなく背が傾斜した、もっと劣性の *Meergha* 種とを示しているものとしてよいであろう」とある。⁽⁵⁾

またチャッタージー氏の説では、象を飼いならし、訓練した最初の人間はプロト・オーストラロイド族で、この動物の名称 *gaja* および *mātanga* はオーストリック語を話したインドの先住民であったろうというのである。⁽⁶⁾

象を飼いならすことは、インドのみではなく、随分古代から他の諸地域でも行われた。メソポタミアの南部で出土した粘土板で前三千年代の末期、または二千年代の始めころのものにインド象に乗った人間が表現してあるといわれ、エジプトでも第十八王朝(前一五八〇頃―一三二〇頃)のトートメス二世(一五一五―一五〇〇頃)はシリアの朝貢者から象を献ぜられたという記録があると、シカゴ大学のブレストッド博士はそのエジプト史中で記している由である。⁽⁸⁾

またトートメス三世(前一四八〇―一四四七頃)はシリアのニー⁽⁹⁾ニ⁽⁹⁾という場所での大巻狩で、百二十頭以上の象を殺したという記録があるという。

アッシリア人の記録にも、メソポタミア地方に多数の象がいたことを伝えたものがあり、たとえばティグラト・ピレセ

ル一世（前一一〇〇頃）はユーフラテス川中流のハラン附近で十頭を殺し、四頭を捕えたということである。⁽¹⁰⁾

その他にも古代オリエント世界に、象がいた記録はいくつもあるようだが、ダマン・シングはその消滅の原因を、人間によって生活環境を破壊されたことや、象牙が人間のあくことのない嗜欲の的となったためであろうという考を述べている。⁽¹¹⁾

また Arianos のアレクサンドロス出征記 (Anabasis Alexandri、第三卷八章) に前三三一年、アルベラの戦に、十五頭の象をつれたインドからの援軍がダリオス三世を助けたという記録はあるが、アレクサンドロスの軍勢が西アジア方面で野生象と遭遇したという記録は見えないから、そのころにはすでにこの地域には、野生の象はいなくなっていたのであろうとも云っている。⁽¹²⁾

二

中国でも、かつては中原地方にまで多数の象が棲息していたこと、少くとも殷時代には人間に飼い馴らされていたに違いないという説が学者たちによって出されている。甲骨文字の象字も「手をもって象を牽くの形」という説が有力のようである。これについては杜学知氏により「古代中原役象考」という論文なども書かれている。⁽¹³⁾ この論文には古代中国人が象を農耕や運搬などに使用したことが、いろいろの典拠によって論じられているが、戦争に用いられたことには言及していない。しかし、前六世紀末、呉と楚との交戦には戦象として利用されたいという説が、耶蘇会の Albert Tschépe 師によって、早くから、提示されている。⁽¹⁴⁾

それは周の敬王の十四年（前五〇六）のことで、呉の軍は楚軍を破り、楚の都の郢に迫り、これを水攻めにした。十一月己卯、楚の昭王は脱出を計ったが、宮廷内に飼育していた何頭かの象の尾に松明を結びつけて点火し、呉軍にむけてけ

しかけたというのである。春秋左氏伝（定公四年）には

「（楚昭）王、燧象を執りて、もつて呉の師に奔らしむ」とある。しかし、あまり効果はなかったと見えて、その翌日、呉軍は楚の都を陥れたのである。A. Tschépe 師は、これに註して

「して見ると、当時、中国では戦象を持っていたのである」といつている。象を飼っていたことは明かであるが、それに乗って戦ったわけでもなく、果して、そのころ戦に象を利用することが、しばしば行われていたものかどうかははっきりしない。例外的にこの場合だけに用いられたものかもしれない。もし、常習的に戦象が用いられていたものならば、もっと外にも記録が残ってもよいように思う。いずれにせよ、中国ではこういう事はあまり世に行われなかったらしい。それは諸家のいうごとく、象そのものが北支那はいうに及ばず、揚子江流域においてさえ、かなり早くから消滅してしまつたためであろうか。

しかし、南方諸国から象を中国の天子に献ずるというようなことは決して珍らしいことではなく、全唐文などにも馴象の賦などが見えている。例へば徳宗時代の独孤良器の放馴象賦（卷六八四）など。

特に元朝時代の史料には、しばしば象のことが現われるが、これを軍事に用いたらしいことまでをマルコ・ポーロは伝えている。果して、それは事実であつたらうか。

元史などにより、南方諸国が馴象を献じた記録を求めると、かなり豊富である。そのうちの数例を次に挙げて見よう。

本紀（七）至元七年二月丁未の項に

金齒・驃国三部酋長阿匿福勒丁・阿匿爪来内附、献馴象三、馬十九疋。

とあり、雲南の西境の金齒国とビルマの北部の驃国^{ビユ}の酋長などが馴象を献じたのである。

同じく卷一〇、至元十六（一二七六）年六月の項に雲南都元師愛魯納速刺丁 Amir Nasr al-Din が西南諸国を招降

し、大理の軍を率いてビルマ北辺の諸国を討伐し、馴象十二を献ずとある。このことは後文で、もっと詳しく考えて見た
い。

同じく其年六月の条には「占城・馬八児諸国が使を遣わし、宝物および象犀各一を以って来り献ず」とある。インドシ
ナのチャンパとインドの西南海岸地方のマアバルが象その他を献じたのであり、同年七月の条にも

「丁巳、交趾国、遣使来貢馴象」とある。さらに卷一一、至元十七年八月戊寅の項には「占城・馬八児国、皆使を遣わ
し表を奉って臣と称し、宝物犀象を貢す」としてあるが、占城国は十八年七月にも象犀を貢している。元史卷二〇、成宗
の大徳六年（一三〇二）六月の項には、安南国が馴象二頭を献上したよしが見えている。

同じ書卷二二、武宗の至大元年（一三〇八）正月己巳の条には緬国が馴象を進ずとある。緬国の馴象については、同じ
年五月の条にも、その六頭が進貢されたとある。

元史卷二三、武宗至大二年九月には

「占八国王、その弟札刺奴等を遣わし、来って白面象、伽藍木を貢す」とある。占八は占城と同じでチャンパの音訳で
あろう。

卷二四、仁宗の即位の年（一二三二）五月の条には、雲南の西部の金齒諸国が馴象を献じたとあるし、同年六月には
「諸王塔刺馬的、使を遣わして馴象を進む」とある。同じ帝の皇慶元年（一二三二）二月には八百媳婦（雲南の南部の蛮
族国家）が使を遣わして馴象を献じたが、同年九月には、八百媳婦と大小徹里蛮などの雲南南部の諸蛮国が馴象および方
物を献じたとある。同年十一月には占城国が犀象を献じ、元史卷二十五によると仁宗の延祐二年（一二三一）十月にも八
百媳婦蛮が使を遣わして馴象二頭を献じ、元朝はこれに対し幣帛を与えたとある。ただに諸外国からの進貢を待つのみで
なく、元朝の方から使者を派遣して海外に象を求めしめたことは、元史卷二十七、英宗の即位の年（一二三〇）九月の条

に

「馬札蜜等を遣わし、占城・占臘・竜牙門に使用して馴象を索めしむ」とあるによって明かである。右のうち、占臘は真臘と同じで、今のカンボジャ地方にあたり、竜牙門は今のシンガポールあたりであろう。

元史卷二九、晉宗の泰定二年（一三二五）七月の条には雲南の大小車里蜜が来朝して馴象を献じたとあり、また同書卷三〇、泰定三年二月にも、八百媳婦蜜の招南通が使を遣わして馴象方物を献じたとある。招南通とはその王の名で、招は王を意味するチャオの音写であろうか。八百媳婦は象の多かった所と見えて、元史卷三十によると、晉宗の致和元年（一三二八）五月の条にも「八百媳婦蜜、遣子哀招、献馴象」とある。

三

元史卷二〇九、安南国の条によると、世祖クビライの至元六年（一二六九）に安南国王陳光昺が、元朝の派遣した達魯花赤の忽竜海牙をして

「陛下須索巨象数頭。此獸軀体甚大、歩行甚遲、不如上国之馬。伏候勅旨、於後貢之年、当進献也」と上奏せしめたところ。お国の馬よりも速力はのろいが、勅旨あれば巨象を進貢したいと申出たのであろうか。これに対し元の中書省は翌七年十一月に安南王に書を送って象を送らしめたとある。なお安南伝には、世祖の至元十五年に安南国王の陳日烜が馴象二頭を献じたことも記してある。

同じく卷二百十の緬甸伝にも象の記載が多いが、元軍との合戦に象を用いたことは後文に譲ることにする。成宗の大徳元年（一二九七）には国王が、その子を遣わして入朝せしめ、毎年銀二千五百両、帛千疋、馴象二十頭、糧万石を上納したいと申出た。しかし、その翌々年には、また同じ世子を元に派遣し、部民が金齒国人に殺掠されて、みな貧乏している

ので、約束の如き金幣を上納することが出来なくなったと陳情してきた。よって成宗はこれを憫んで、ただ「間歳貢象」を命じたとある。一年おきに象を献上せしめ、他の品々は免除したのであろう。また緬国王は大徳四年に使を遣わして白象を進めたともある。

占城（チャンパ）でも戦争に象を使用したことが、元史卷二百十、占城伝に見えている。世祖の至元二十年（一二八三）正月、元軍が占城軍のたてこもった木城を攻めたとき、「賊（占城軍）木城の南門を開き、旗鼓を建てて出づ。万余人。象に乗るもの數十。（元軍）亦三隊に分れて敵を迎う。矢石交下。卯より午に至る。賊敗北し、官軍（元軍）木城に入る」とあるし、また占城の王族宝脱秃花が元軍の手を脱し、象に乗って山中に遁入したという記載もある。

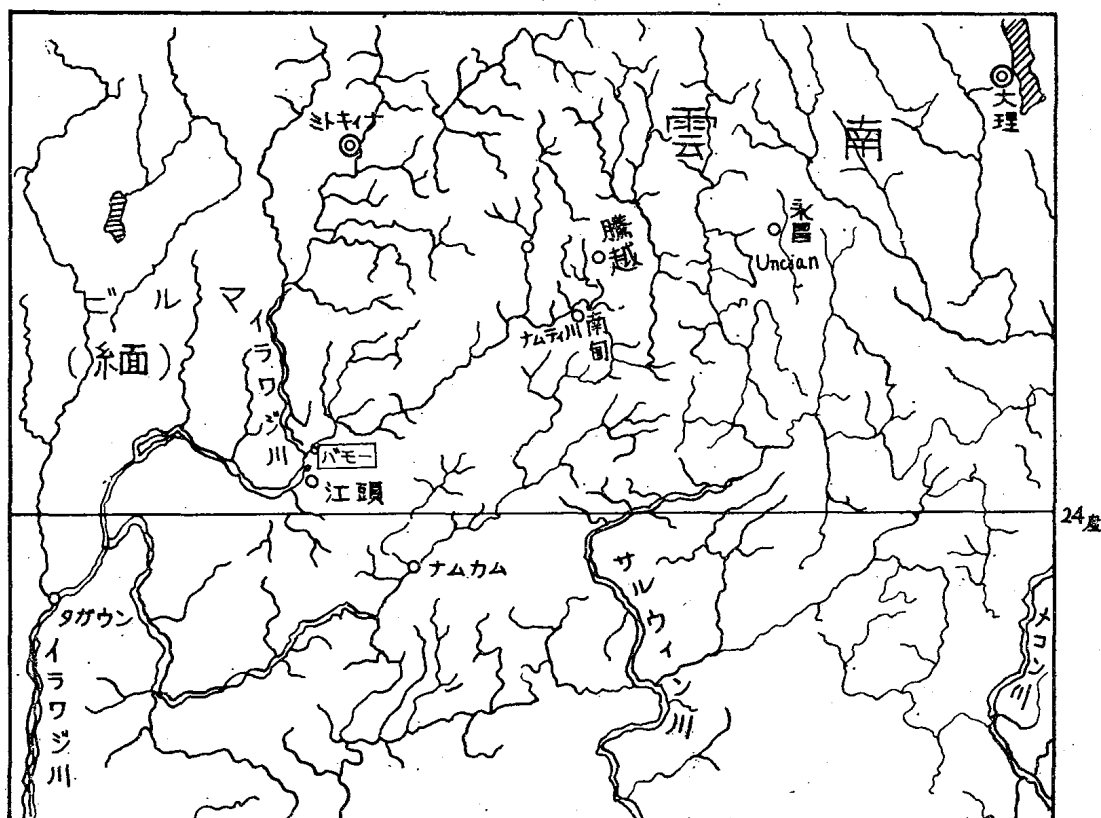
このように、元朝一代を通じ、相当数の馴象が南方諸国からもたらされたらしいが、元朝ではこれらを何に用いたものであろうか。元史（七九）輿服志には

象輶、駕以象。凡巡幸則御之。

とあり、皇帝の巡幸に象の背に輶を負わしめたものを用いたらしい。今、出所を明かにしないが、世相クビライが出御するにあたって、これを用いたところ、象が暴れて騒ぎになったというような記録があったように思う。

マルコ・ポーロは、元朝では少くとも至元年間のなかばころから、象を軍用に用いたらしいことを伝えている。軍用に使用したものならば、かなり多数を必要とするから、しばしば南方諸国から上納せしめたことの理由も納得できるであろう。しかし、ポーロのこの辺の所伝がどこまで信用できるであろうか、随分と疑を抱く人々もあるので、その辺の所を少しく検討して見たいと思う。

四



ポーロの書には、元軍が雲南の西境で、戦象の群を先頭にたてて攻めよせた緬国（パガン朝のビルマ王国）の大軍と戦って勝ったことを興味深く伝えた個条がある。いま、アンビス氏のテキストによつて、訳出すると左の如くである。

「ウンチャン Uncian 王国（永昌）で起ったところの、まことに素晴らしい（別本には、その名も高い）戦争のお話することを忘れていたと思召されよ。その戦のことを、この本のかで、物語るのはよいことであろうから、それが一体どうして、またどんな工合に起ったものであるかをひとつ明細にお話したいことにしよう。

キリスト御出世後一二七二年（元、世祖クビライの至元九年）に大汗には、ネスクラディン Nescradin (Naṣr al-Dīn) という名の大貴族のひとり、大軍とともにウンチャン（永昌）やカラジャン Caragian（合剌章又は黒爨）などの諸国にお遣りになったという話は本当の話であるが、それというのも、これらの国々が大汗の領土のはずれにあるので、よく守られ、またよその民が害を加えることのなきようするためであったのだ。

大汗はその地にまだ、その子のひとりを守として派遣していなかったが、後には、すでに世を去ったその子の更に子にあたる Esentemur (筆者註・第五王子でさきに雲南王に封ぜられた忽哥赤の子。當王也先帖木兒のこと) をその王とされた。

たまたま Mien (緬) や Bengala の王たちは、領土にしても、財宝にしても、人民にしてもきわめて強力だったが、いまだかつて大汗に臣属していなかった。しかし、間もなく大汗は、かれらからその王国を取りあげておしまいになったのだ。ところで緬やベンガラ王の王たちであるが、大汗の軍勢すでにウンチャン (永昌) にありということを知らず、やがて自分たちの領土を侵略するであろうと心配し、恐慌を起してしまった。そこで互に相談することには、これを防ぐがためには、こちらから、充分な大軍を繰出して攻め寄せ、相手を皆殺しにしてやらねばならぬ。大汗がさらにあらためて別軍を送る意志を持たなくなるほどに手痛くたたいてくれねばならぬということになった。そこで、この王たちは、とても大がかりな準備を整えたが、どんな準備かは次に申上げよう。

ところで、まったく正直なところ、彼等は二千頭の巨象を持っていたと思召されよ。そうして、これらの象のそれぞれの上に、頑丈な木造の城 (楼) を組ませたのだが、これらは戦闘を行うために都合のよいように造られてあった。それぞれ楼の上には少くとも十二人の戦士が乗っていて、弓を射たり、格闘したりするのである。時には同じようにして十六人の戦士が乗っているものもあれば、さらにそれ以上の数のものが乗っているものもあった。それから更に六万の騎兵および歩兵を持っていた。

かくの如く強大な王者として、その權威にふさわしい準備をしたのである。それで、大戦戦を行うに足る十分な兵備が成ったと御承知あれ。さて、何と申したらよいかな。この王たちは、このような大規模の準備をするというと、もはや、ぐずぐずしていなかった。いやそれどころか、すぐさま、その全軍とともに、ウンチャン (永昌) にあった大汗の軍に襲

いかかるために征途についたのである。彼等は、とくに申上げる値うちのあるほどの事件にも会うことなく、タルタール（モンゴル）軍から三日行程のところまで到着し、そこに天幕を張って滞陣し、兵たちを休養させることになった。⁽¹⁵⁾

右のうち、一頭の戦象に普通、十二人の戦士が乗るといふ箇条がある。ダマン・シング氏によると、古代インドの戦闘では、戦象に乗るのは国王も一般民も区別はなく、パーリ語仏典、とくに *Buddhaghosa* が註訳した *Vinaya Pitaka* によれば、一頭の象には十二名の戦士がつくが、背上に乗るのは四人で、他は象の脚のところに、二人づつ配置される。そしてこのような象戦の伝統は少くも西紀前六世紀ころまで溯りうると言っている。⁽¹⁶⁾ しかし、象の背上に乗る戦士の数は、必しも一定せず、十人、十五人、二十人などという場合もあつたらしいことは、ユールも言及している。⁽¹⁷⁾

ポーロの話は更に続いて

「タルタール（モンゴル）軍の大將は、かの王たちが、そのような大軍をひきいて押寄せてくるということを探知すると、甚しく心を悩ました。それというのも一万二千騎しか手元に持っていなかったからである。しかし、確かに彼はきわめて勇氣ある良將であつて、その名をネスクラディン（ナスルッ・ディーン。元史卷一二五の納速刺丁）といった。彼は適切にその軍勢を率い、かつ戒めていた。また全力をつくして、その国と民とを守ることに努めていた。これはまた、私としたことが、何故そんな長話をしなければならぬのだろうか？とに角、一万二千騎のタルタール軍が永昌の平原に出動し、そこで敵軍が来襲するのを待ち構えていたと御承知あれ。そうしたというのも彼等を率いるこの名將の賢明な指図によつたからである。なぜかというに、その平原のすぐ近くには大きな森があり、大樹が森々として立ち並んでいたということをお承知いただきたい。

彼等は、象はその棲を背負つたままでは密林にはいれぬことを知っていたから、敵をそこに誘ひこむために森のすぐ近くに陣をかまえていた。つまり、もし象がとても抗し得ぬほどに勢だけく攻めかかつて来たならば、こちらは森中に退い

て、安全なところから、矢ふすまを浴びせることが出来るだろうからである。大将は麾下の騎士たちを自分のところに呼び集めて、この上ない雄弁をもってこれを励まし、これまでと少しも劣らず勇猛な働きをせよ。兵の強弱はその数の多寡にあるのではなく、勇敢で場数を踏んだ騎士たちの素質如何にかかっている。そして緬国やベンガラの王たちの兵衆は経験に乏しく、実戦に慣れていないのに対し、味方の軍は永年の経験を積んでいるのだ。されば、敵の数多いことを恐れてはならぬ。味方の練達さは、多くの場所で、度々の合戦にあまたたび実験済みであり、その名は単に敵人たちばかりでなく、全世界から怖れられているのだから、これにこそ頼るべきである。またその故にこそ味方は、今迄に変わぬ勇氣を示すに違いないのである……とこう説き聞かせた。そして最後に、味方の決定的勝利は確実であると保証するというのであった。

今までお聞きになつたような事情のもとに、タルタール軍は、その平原で敵を待ちうけていた。だがここでタルタール軍のことはしばらく措き、もう少しあとでまたお話することにして、今度は敵軍の方のことをお話ししよう。所で、こう御承知おき願いたい、緬国の王はその全軍とともに、暫くの間、滞陣していたが、やがてその地を進発して、行軍をはじめ、ついにタルタール軍が待ちかまえているかの永昌の平原に到着したのである。緬国王はかの平原の敵の軍勢から、ほぼ一マイルのところまで来ると、楼と十分に武装した戦士等を背に乗せた象群を合戦の体形に配列した。そして、その後には騎兵と歩兵とをまことに巧妙に配置したが、これは彼の如き賢名な王者にふさわしいやり方であつた。彼はこのような処置をすっかりなし終り、無数の楽器をうち鳴らさせると、その全軍をひっさげ、敵軍にむかって攻めかかった。

タルタール軍の方は、彼等が押寄せてくるのを見ても、いささかも狼狽した様は見せず、雄々しくも、また大胆不敵の態度を示していた。彼等が一団となり、隊伍齊々として、健気にも敵に向って進みはじめたということを、確かに御承知おき願いたい。ところが、いよいよ敵に近接し、まさに合戦がはじまるばかりかという時になって、タルタール軍の馬

は、恐ろしく巨大で、楼を背おった象群が、第一線にずっと立ち並んでいるのを見るや、すっかり脅えてしまったものだから、タルタール人が敵にむかって進ませようとしても進めばこそ、かえって首を転じて逃げ出すという始末であった。すると(緬国)王とその部衆は、象群とともにひしひしと進んで来たのである。

タルタール人たちは、それを見るや、大に怒ったけれども、どうしてよいかわからなかった。何故ならば、馬を進めることが出来なければ、万事休すということをはっきりと見てとったからである。けれど、結局、まことに賢明な行動をとるに至ったのだが、どうしたかは次にお話することにしよう。まず御聞きあれ、タルタール人たちは味方の馬がすっかり脅えてしまったのを見るや、それから降り立ち、馬を森の中に入れて、立木につないでしまった。そうして弓を手にとったが、これにかけては彼等はお手のものなのである。それから矢をつがえて徒歩で象軍にたち向かい、矢ぶすまを浴びせはじめたのである。(別本には、弓射にかけては彼等は世界中のどの軍隊よりも優っていた)彼等は驚歎すべき手並みで矢を射かけたので、多くの象が重傷を負い、また多くの戦士も同様であった。しかし楼の中にいた(緬国)王の兵たちの方も、まことに勇敢に矢をあびせかけ、猛烈に攻撃をかけたけれども、彼等の矢はタルタール人のほどひどい傷を与えなかった。というのは発射する力がそれほど強くなかったためである。さて、それから、何と申しあげたらよからうか。とに角、御承知おき願いたいことは、象どもは唯今、お話した如く傷を負うというと、くるりと方向を転じて、(緬国)王の軍勢の方へと逸走しはじめたと申上げておこう。そのすさまじい物音といったら全世界も裂け散るかと思うばかりであった。象どもは森のところでも止まらず、その中に突入したから、背に負った楼をへし折り、何もかも、滅茶滅茶にぶちこわしてしまったから、楼の中にいた人たちまで結構惨殺してしまった。それというのも象どもが、身の毛のよだつような恐怖の叫び声をあげながら、森の中を右往左往して走りまわったからである。

タルタール人たちは象どもが、いま貴方たちがお聞きになったような風に逃げ出し、(緬国)王の軍勢が混乱状態とな

ったのを見ると、少しもためらうことなく、すぐさま規律整然として、馬に跨ると、象の戦隊が潰滅したのを見て、少からず驚慌をおこしていた国王とその軍隊にむかって突進したのである。そして壮烈かつ獐猛な戦闘がはじまったが、それは国王とその軍隊が勇敢に防戦したためであった。

彼等は矢を射尽してしまふと、剣と鎚矛を手にとって、勢たけく互に挑みかかった。そして恐ろしい打ち合いが行われた。剣と鎚との強打を与えつ受けつであつたろう。

騎士と騎馬とが斃れるのを見ることが出来たにちがいない。手が、腕が、肩が、首が、切断されるのを見ることが出来たにちがいない。何故ならば、あまたのものが死に、あるいは致命傷をうけて地に横たわっていたからである。叫喚と騒音はけたたましかったから、よし神が雷鳴を起したもうとも誰も耳にとめなかったであろう。激突と争闘は至るところで、大きく、かつ凄じさの極みであつた。けれど、タルタル軍が敵を圧倒してしまつたことは、しかと御認め願いたい。それというのも、その日の合戦は（緬国）王とその兵衆にとって不吉なしるしのもとに始まり、夥しい数が、その日、その戦場で命を失つたからである。そして、合戦が、昼過ぎまで続いたとき、国王とその軍勢は惨々に打ち悩まされ、殺されたものも数あまたに達したので、もはや持ち耐えることは出来なくなつてしまつた。何故ならば、これ以上そこに踏み止まつたならば、全滅は必定ということがわかつたからである。そのため、もう踏み止まろうとは思わずして、命からがら逃げ走りはじめた。

タルタル勢の方は敵が卑怯にも逃げ走ると見るや、追いつがつて、討ちこらし、むごたらしい殺戮をほしひまにしたので、見るも無惨な光景となつた。しかし、しばしがほど追撃すると、もはや追うことをやめて、敵の行くにまかせてしまつた。そうして、味方を集めて、象を捕獲するため、かの森にひきかえした。そして彼等（タルタル人）はなんと、象の行手をふさぎ、もっと奥にはいつて行けぬようするために巨木を次々と伐り倒しさえしたのである。けれど、そ

んなことをしても全く無駄で、象を捕える役には立たなかった。

しかし(緬国)王の兵たちで、捕虜となった連中であるが、これらは、うまく象を捕えることが出来た。何故かというに、彼等は(タルタル人よりも、象の扱い方を)よく知っていたし、象の方でも、この人たちの言葉をききわけたからである。このようにして、彼等は二百頭を捕えてしまった。そして、大汗(クビライ)が、その軍隊のために充分なだけの象を保有するようになったのは、この合戦以来のことなのである。またこの戦争のおかげで、大汗は緬とベンガラ地方のすべての国々を征服し、その支配のもとに置くことになったのである。⁽¹⁸⁾」

右の文中で注意をひくのは、クビライ汗が、「その軍隊のために充分なだけの象を保有するようになったのは、この合戦以来のことなのである」という一句である。

軍隊のために象を保有するといえば、まずこれを戦闘に利用したものと受取ってもよいように思われるが、従来、戦象を用いたという記録が殆どない中国で、果して元代にはこのことがあったのであろうか。あったとすれば新機軸として特筆すべき価値があるであらう。ユールのマルコ・ポーロの書には単に

And it was from this time forth that the Great Kaan began to keep numbers of elephants.⁽²¹⁾

とあるのみで、果して軍用のためのものか、どうであるかは明記してないが、Hambis のテキストには明かに

Et c'est depuis cette bataille que le Grand Can commence à avoir des éléphants assez pour ses armées.
としてあるのである。またモールとペリオトによる英文テキストには、更にもう少し詳しくして

And from this battle the Great Kaan begins to have elephants in plenty for his armies, though before
he had had none for the army.⁽²²⁾

としてあり、この戦まではクビライ汗はその軍隊のためには一頭も持たなかったのであるが、これ以後は多数の象を保

有するようになったというのである。

五

ここで元軍とビルマ軍との交戦の事情をもっと詳しく見る必要が出てくる。

幸にして中国側史料に無名氏による「至元征緬録」(別名は元朝征緬録)の如きものがあり、四庫未入書目提要によれば元の英宗の至治元年(一二三二)ころの書らしいとある。元史卷二一〇、緬国伝はこの書から、いろいろと引用していることが明かであるが、ポール・ペリオと並んで、フランス東洋学のホープと目されながら、惜しくも夭折した Edouard Huber もその研究中に利用している。⁽²¹⁾ いま征緬録の象の戦の部分引用すると。

(至元)十四年(一二七七)三月、緬人以阿禾内附。怨之、攻其地。欲立砦騰越・永昌之間。時大理路蒙古千戸忽都・大理路総管信苴日・総把千戸脱羅脱孩奉命伐永昌之西、騰越・蒲驪・阿昌・金齒之未降部族、駐南甸。阿禾告急。忽都等昼夜行与緬軍遇一河辺。其衆約四万、象八百、馬万疋。我軍僅七百人。緬人前乘馬、次象、次歩卒。象被甲、背負戰楼、兩傍挾大竹筒置短槍數十於其中、乘象者取以擊刺。忽都下令「賊衆我寡。当先衝河北軍」。親率二百八十一騎為一隊。信苴日以二百三十三騎傍河為一隊。脱羅脱孩以一百八十七人依山為一隊、交戰良久。賊敢走。信苴日追之三里、抵塞門旋濤而退。忽南面賊兵万余繞出我軍後。信苴日馳報忽都。復列為三陣進至河岸、擊之。又敗走。追破其十七砦。逐北至窄山口。戰三十余里。賊及象馬自蹂死者盈三巨溝。日暮。忽都中傷。遂収兵。明日追之至千額不及而還。捕虜甚衆。軍中以一帽或一兩靴一氊衣易一生口。其脱者又為阿禾・阿昌、邀殺歸者無幾。而官軍負傷者雖多、惟一蒙古軍擊獲一象、不得其性被擊而斃。余無死者。

とある。マルコ・ポーロの伝えた合戦とかなり似ているが、ネスクラディン(納速剌丁)がこの戦に参加したというよ

うな記録はない。彼のビルマ遠征のことは征緬録の右掲の文のすぐあとに

「至元十四年」十月、雲南省、遣某道（元史には雲南諸路）宣慰使都元帥納速刺丁^{ナハスチ}率^{さん}蒙古・爨^{ほく}・爨^も・摩些^も軍三千八百人、征^レ緬。至^ニ江頭^ニ深^ニ蹂^ニ酋首細安立^レ砦之所。招^ニ降其木・乃木・要蒙・帖木・巨木・禿磨欲等三百余砦、土官曲臘蒲折民四千・孟磨愛呂民一千・磨柰蒙匡黑答八刺民二万・蒙古甸甫祿保民一万・木都彈禿民二百。以^ニ天熱^ニ還^レ師」
としてある。

前者はビルマ人が南甸^{ナムティン}の土酋阿禾が元朝に内附したのを怒って来襲したのに対し、大理方面から出動した元軍が撃退した戦で、マルコ・ポーロのいうように永昌の附近ではなく、そこから更に百キロも西に行った南甸のナム・ティ川畔で行われたものである。至元征緬録によれば、そのときの元軍の将はモンゴルの将忽都、大理路総管信苴日らであつた。信苴日は、別に段日とも、段実とも書き、昔の南詔国の後である大理国の段王朝の王子で、最後の大理国王段興智の子である。大汗マング（憲宗）の二年（一二五三）にクビライが雲南に遠征して、大理国を滅ぼしたあと、段家を温存し、大理都元帥府を設け段氏を代々その総管に任じた。信苴段実（日）は第一代の総管で、それから子孫相うけて第十一代の信苴段明のときにまで及んでいる（明の楊慎の滇載記に詳しい）。征緬録に記されたこの戦が普通、マルコ・ポーロの伝えた永昌附近の象の戦のことと考えられている。しかしネスクラディンこと、ナスルッ、ディーン（納速刺丁）がこの戦にも参加し、主将として活動したという言及がないのは一体何故であろうか。

ナスルッ・ディーンは元代史上に有名な賽典赤（Sayyid Ajall Shams al-Din 'Omar al-Bukhārī）の長子で、父、賽典赤は元史（卷一二五）のその人の伝にもある如く、中央アジアのブハーラーの名家の出で、予言者マホメットの子孫といわれ、成吉思汗西征のみぎり、まだ十才位だったが千騎をひきい、文豹白鶻を携えて投降した。すこぶる信任されてあまたの重任に当った後、至元十一年にはクビライにより雲南の長官（行省）に親任され、ここでも治績をあげたが、

至元十六年に任地で世を去った。ナスルッ・ディーンの伝も、父賽典赤伝と共に元史（一二五）に入れてある。征緬録によると、この人のビルマ遠征は至元十四年十月のことであり、信苴日等の象の戦はその年の三月のことであって、同じ年に二回、ビルマ人と戦ったというのである。そして、ナスルッ・ディーンが率いた第二回目の役は、深くイラワジ河畔の江頭 Kaungtung (Bhamo 附近) まで到ったものであるとしている。

征緬録のこの二つの戦争の記録と、マルコ・ポーロの伝えた永昌附近の象の戦と、その内容に一致せぬところがあるので、従来このことについていろいろの解釈が行われてきた。果して、征緬録をそのまま信じて、ポーロの話には誤りがあると、一概に片つけてしまつてよいものであらうか？

ユールは大略、次のような意見を述べている。

「永昌地区の合戦とナスルッ・ディーンのイラワジ河方面への進撃は、それから数年後の緬国（パガン王朝）への元軍の侵入・征服とは全く別のものである。前者にあたる二回の戦のことはビルマ側の年代記には全く記載がない。

フエア Sir Arthur Phayre は、そのビルマ史中で永昌附近の合戦のあったことを否定している。その根拠はビルマ側の年代記にその記録がないし、当時のビルマは元朝の勢力に対し全く守勢の態度に終始していたから、先手を打って雲南の西境に進撃したとは考えられないというのである。しかし自分（ユール）はこの意見を尊敬はするが、同意することには出来ない。永昌附近で元軍とビルマ軍との間に合戦が行われたことは、マルコ・ポーロも伝えているし、これと一致する記録が中国側にもあるからである。」これによると征緬録の一回目の戦を永昌附近で行われたものとしているのであり、それがポーロの伝えたものであると考えているのである。また Henri Cordier は、一九世紀末、永昌附近を踏査したコルボーン・ベーパー Colborne Baber の大略左の如き説を紹介している。ベーパーは⁽²²⁾

「この辺で、元軍とビルマ軍が大会戦を行ったという事がミスティカルであるという理由は全然ない。モンゴル軍が森

林を利用して勝利を収めたということも、この辺の実際の条件とよく合致している。モンゴル人が象の大軍と交戦したのは、それが最初の機会だったように思われるが、このことが勝利を一層記念すべきものとしたのである」といい、永昌から騰越に赴く途中の地形などを細かく説明して、ポーロの伝えた如き会戦が実際に行われたものであることには少しも疑を持っていないのである。

ルイ・アンビス Louis Hambis 氏の意見によると元朝とビルマとの戦争は次の如く行われたというのである。まず至元八年（一二七一）雲南の元師府がビルマ王 Narasihapati のもとに使をやって内附を求めた。王は応じなかったが、使者を優遇して送りかえた。至元十年（一二七三）クビライの使節はあらためて都パガンまで来たが、ビルマ王はこれを殺し、機先を制して金齒（ポーロのザルダンダーン）に攻め寄せた。元軍はこれに対して至元十四年から翌年にかけて二回、ビルマ軍を破ったが、決定的勝利に至らず、至元二十年（一二八三）に深くイラワジ川について下りビルマを侵略した。ビルマ王はパガンを放棄したけれど、元軍もそこまでは達し得なかった。ビルマ王はその子 Sihasura のため至元二十年頃に毒殺された。至元二十四年（一二八七）元軍はついにパガンに入り、またビルマ王の位にはナラシハパティの別の子 Kyozawa が立った。ただしポーロがネスクラディン（ナスルッ・ディーン）の功に帰している象軍との合戦（一二七七年春）はポーロの誤伝であり、実はネスクラディンは同じ年の冬から翌年にかけてのバモー方面への遠征軍を率いたのである。⁽²³⁾

この間の事情をビルマ側史料と中国側史料とから最も精細に研究し、しかもかなり違った結論に達したのは E. Huber であつた。彼は象軍と元軍とが戦つたのは永昌附近ではなくもっと西方、騰越の西南方にあたる南甸^{ナムティン}に近い Nam-ti の溪谷であり、ビルマ軍は決して永昌附近まで迫つたことはなかったとした。また元軍の主将もナスルッ・ディーン（ネスクラディン）ではなかつた。ユールやベーパーがここぞと信じていた所とは約百キロほども西へへだつた所が本当の戦場だつ

たのであるといい、さらに「本当のところ、ビルマについてのマルコ・ポーロの諸章は、興味本意の文学的奇談のひとつで、あまり厳密に詮索すべきではない。数多くの長たらしい註釈をつけて見ても、どうせ不正確なものとなることは免れ得ぬところであるから、そういうものは外して読んだ方が得る所が多いのである」という意味の言葉をつけ加えている。⁽²⁴⁾

結 論

私はしかし、ユーベル氏の如く、ポーロの所伝を片つけるのは危険ではないかと考えている。マルコが父や叔父とともに、はじめてクビライ汗の廷にやつてきたのは至元十二年（一二七五）頃とされているが、彼が最初に派遣されたのが、雲南のカラジャン（加刺章）地方、すなわちその西境地方であったという。故に元軍とビルマ軍との交戦の行われてのち、そう歳月の経っていない、いわば、まだその記憶の生々しいところに、永昌や金齒などを訪れ、さらにビルマ方面にも旅行したらしい形跡もある。故に、かなり確実な筋から情報を得たと考えて決して不合理ではあるまい。ユーベルは *une amusante curiosité littéraire* という言葉で、彼の報道を片つけているが、精密な学風の彼の言葉としては、やや簡単に割り切りすぎたという観なきあたわずであろう。元軍がいかにビルマの戦象を撃退したかということなどについて、ポーロは他の史料に見られぬユニークな価値のある伝えを残している。ポーロより時代がおくれた征緬録のみをそのままに信用して、ビルマ軍が一時は永昌附近まで迫ったことまでを否定してよいのであろうか。征緬録は元人の筆になるもののであるから、深く敵に攻め込まれたことなど省略する可能性もあるであろうし、その征緬録にさえ「至元十四年緬人犯辺」「欲立砦騰越永昌之間」などとビルマ人の侵入を暗示する句もあるのである。

私はやはり、ポーロの伝えた如く、ビルマ軍の方がはじめは永昌附近まで侵入して来て、そこで最初の戦が行われたものであろうと考える。つまり現地を調査したコルボーン・ベーパーの意見がよいと思つてゐる。そうして至元十四年三月

の役と十月の役は、これに対して元軍が追討ちをかけた第二、第三の戦ではなかったかと想像するのである。

明の阮元声の南詔野史によると宋の景炎二年(元の至元十四年)十月、「緬犯永昌。元命納速剌丁伐之。破砦三百。天暑還師」とあつてポーロの書などとは全く無関係の立場からビルマ軍が永昌を犯したと云っている。そして、私は永昌西郊の戦でビルマの象軍を破った時も、やはりナスルッ・ディーンが元軍を率いたのではないかと思うのである。つまりマルコ・ポーロのこの辺の所伝を殆どすべて実際に近かったこととして受入れ、これを抹殺する代りに、至元征緬録などを補うものとしてよいかと思うのである。このことはマルコ・ポーロの所伝の信憑性の問題にも関係してくるであろうが、永昌の戦の所伝を事実とすれば、したがって、この役で多数の象を得たクビライが、これらをその軍に用いしめたということもやはり真実ではないかと推察される。安南や雲南、ビルマなど南方地域でも兵を用いることが多かったので、そのような地域の戦にはやはり象を必要としたのではないかと考えられるからである。

註

どうかについては疑問がある。

(1) H・ロート著、永戸多喜雄訳「タッシリ遺跡」(昭和三五、東京)頁一八、六九、七六、一七〇等。七六頁のあとに象の絵の写真が出てゐる。

(2) Gilbert et Colette Charles-Picard, *La vie quotidienne à Carthage au temps d'Hannibal*, 1958 Paris, pp. 200~202.

(3) 'Ata-Malik Juvaini; *The History of the World-Conqueror*, translated by I. A. Boyle, Manchester University Press, 1958, Vol. 1. p. 117, 120, 322~3, 360. 西遼がホラズムから捕獲した象を、やうに利用したか

(4) Sarva Daman Singh; *Ancient Indian Warfare with Special reference to the Vedic period*, Leiden, 1965, Chapter 4, pp. 72~84.

(5) Stuart Pigott; *Prehistoric India*, (Pelican Book), 1961. London, p. 157.

(6) Daman Singh の書頁十三に引用の S. K. Chatterji; 'The Vedic Age' 1951, p. 150.

(7) Singh, p. 73, James F. Downs, *The Origin and Spread of Riding in the Near East and Central Asia*, American Anthropologist, vol. 63, no. 6, Dec. p. 1961,

- 1197.
- (8) Singh. p. 73 正用 J. H. Breasted, A History of Egypt, II. London 1951, p. 271.
- (9) Breasted, *ibid.*, p. 304.
- (10) E. A. W. Budge and L. W. King; *Annals of the Kings of Assyria*. pp. 85, 86.
- (11) Daman Singh; pp. 73, 74.
- (12) *Ibid.* p. 74. note 1.
- (13) 大陸雜誌史學叢書第一輯第三冊、先秦史研究論集(下)所収。同著伊藤清司氏の教示によりこの論文のあらわさを知ら得た。
- (14) P. Albert Tschépe; *Histoire du Royaume de Tch'ou, Changhai* 1903, p. 263 and Note 5. *Journal of Royal Asiatic Society*, 1898, p. 131, Note 1 463。
- (15) Marco Polo; *La Description du Monde*, texte intégral en français moderne avec introduction et notes par Louis Hambis, Paris 1955, pp. 176~77.
- (16) Daman Singh; pp. 79~80.
- (17) H. Yule & H. Cordier, *The Book of Ser Marco Polo*, London 1926, Vol. II, p. 100. Note 3.
- (18) Marco Polo; *Description*. pp. 177~79.
- (19) Yule & Cordier, Vol. II, p. 104.
- (20) A. C. Moule & P. Pelliot; *Marco Polo, the description of the world*, London 1935, Vol. I, pp. 291~2.
- (21) Eduard Huber; *Etudes Indochinoises*, V.-La fin de la Dynastie de Pagan, BEFEO, Tome IX, No. 4, Hanoi 1909.
- (22) Yule & Cordier; *Marco Polo*, Vol. II, p. 105. Note 3. Colborne Baber; *Travels and Researches in Western China*, London 1882.
- (23) L. Hambis; *La Description du Monde*, p. 395, *Nesc-radin* の項及び *Mien* の項。
- (24) E. Huber; *Etudes Indochinoises* (BEFEO, Tome IX, No. 4) p. 651 note 1. p. 662→